

『嵐が丘』と「ルーシー・グレイ」

吉 田 泰 彦

本稿においては、『嵐が丘』の物語の一部はおそらくワーズワスのバラッド詩「ルーシー・グレイ」が下敷きになっていること、また、キャサリンとヘアトンの散歩がワーズワス兄妹の日常的な習慣となっていた戸外の散策と共通するものがあること、そして、これら二つの要素が『嵐が丘』のロマン主義性に関係していることを論じる。

最初に検討したいことは、都会の俗塵を離れて田舎暮らしの休暇を目論んでいるらしいロックウッド氏のはるばるロンドンから（舞台がヨークシャーの山岳地帯に位置していたことは後々明かされるのだが）やってくる物語の導入部における事態の展開についてである。一見したところ、ロックウッド氏はよそ者としての語り手にしかみえないが、—あるいは実質的な語り手エレン・ディーンの聞き手というべきか—以下に示した詩的效果を考慮する時、少なくとも物語の導入において彼が果たす役割には、少なからぬものがあるというべきだろう。同氏が嵐が丘邸を訪れてすぐさま犯す数々のへまな当て推量などなどから、彼はとんまで滑稽な役回りを帯びた登場人物との評価があるようだが、ロックウッド氏を小説技法上無意味な人物と断定するのは誤りであろう。たとえば、冒頭の一節にはいくつかの重要な標識が含まれている—すなわち、年代の特定、次にこの地が格別景観に恵まれていて、さらに、世間のざわめきからも隔絶していること。

1801.—I have just returned from a visit to my landlord—the solitary neighbour that I shall be troubled with. This is certainly a beautiful country! In all England, I do not believe that I could have fixed on a situation so completely removed from the stir of society.¹

明らかにロックウッド氏の提供になるこれらの項目は一見なにげなくもみえるが、物語を一度通読した視点から判断すると、単にカジュアルな情報と決めつけることは困難だ—なぜなら、これらの標識は三つ合わさって英文学上の一時代を画するロマン主義運動を指し示す可能性を秘めているからである。このように考えると、狭義で言うところの同氏の人物造型と物語話者として果たす機能とは区別しなければならないことが理解できるであろう。もう一人の話者エレン・ディーンもそうであるが、ロックウッド氏は物語の外側の高みから自分と無関係に進展する状況を俯瞰するばかりではなく、はじめの3章においては、みずから読者を状況の中へ導く案内人であり、さらにいうならば、ある意味で状況を脚色する案内人も形容すべき語り手である。ほぼ無色透明のそれとは異なって、このように状況を作り出す語り手は、リチャードソンやバーニーの書簡体小説では至極普通のものであり、彼らにとって物語とは、主要な登場人物それぞれの個性的な性格や立場という幾種類ものフィルターを通して観察された事態や提示された所感の総体である。したがって、『嵐が丘』は、たとえばオースティンのキャンノン作品のスタイルとは異なる書き方であり、語り手に関する限り、先祖帰りした、幾分とも古めかしいスタイルを採っているといえる。このように規定した後で、実際にロックウッド氏が物語にとって何をなしているのかみてみよう。ただし、ここで注意したいのは、ある登場人物が何かを「なしている」という時、その人のバイアスをもった行動、発言だけではなく、その人に割り振られた運命や天候などの付随的状況をも含むということである。そして、ここまで大掛かりな手法は小説というより、むしろ詩作品で通常用いられる手法とっていいであろう。

また、別の言い方をすれば、嵐が丘邸訪問にまつわってロックウッド氏の身に起きる数々のトラブルは何か意味があるのだろうか。あるいは、単なる偶然なのだろうか。これに関連した描写を第2章から二三書き写せば以下のような

I took my hat, and, after a four-miles' walk, arrived at Heathcliff's garden-gate just in

time to escape the first feathery flakes of a snow-shower. [6]

“Why? Cannot you tell her whom I am, eh, Joseph?”

“Nor-ne me! I’ll hae no hend wi’t,” muttered the head, vanishing.

The snow began to drive thickly. I seized the handle to essay another trial; [6-7]

“and I fear I shall be weather-bound for half an hour, if you can afford me shelter during that space.” [8]

“Half an hour?” he said, shaking the white flakes from his clothes; “I wonder you should select the thick of a snow-storm to ramble about in. Do you know that you run a risk of being lost in the marshes? People familiar with these moors often miss their road on such evenings and, I can tell you, there is no chance of a change at present.” [8-9]

時間的順序に沿って発生する天候の変化を記述する上記3節は、純粹な天候変化の観察に加えて、それぞれ、それに遭遇したロックウッド氏の、かろうじて雪中行を免れた安堵感、屋内に避難しなければという慌てふためき、吹雪をおして帰宅を急げば道に迷うばかりか沼に沈む危険さえ否定できない事態、すなわち、徐々に緊迫していく状況を内包している。したがってこれら3節は、表向き心理分析と呼べるものは含まないものの、ロックウッド氏の濃厚な感情的変化を内包しており、さらには、読者の段階的な情緒的関与—疑いなく、ほとんど気づかないままにコントロールされて—さえもが可能になるように工夫されているとっていいだろう。そして、初めてこの小説を経験する読者にとっては、ロックウッド氏の陥っている窮境がこの段階で理解すべきすべてであり、彼の立場からしか状況を見渡す術は与えられていない。天候の悪化と、雑居所帯内部の、混乱して敵対的な人間関係、および、彼自身に対する非礼なほどの冷淡な応対、というふたつの相反するベクトルの悪条件に挟み撃ち

になって、ロックウッド氏は文字通り立ち往生せざるをえない。読者の意識にへばりつくように執拗に追求されている同氏の窮境が、おそらくは物語の基調となるであろうと予想することは不自然ではないし、物語のその後の展開から判断すると、この予想は正しいのである。要するに、本質的に両者は無関係であるにもかかわらず、ロックウッド氏の抜き差しならない状況は、嵐が丘所帯に巢食う解決の見込みのない行き詰りを象徴しているといえる。通常の小説技法という観点からみるとこのような手法は非論理的、非理性的といわざるをえないが、読者に不信の念の一時的な中断を促すことによって、『嵐が丘』のゴシック的超自然を受け入れさせるために講じられた必要な措置であろう。

ロックウッド氏の窮境は最終的に彼の悪夢において頂点に達するのであるが、それと同時に、読者はロックウッド氏の物語を離れ、嵐が丘邸を覆い尽くす（読者にとって）理解不能な敵対的状況の淵源を通じて、『嵐が丘』物語へと導入される。

次に検討したいことは、ロックウッド氏の窮境と『嵐が丘』の中心的人物のひとり、一代目キャサリンの幻影登場の挿話との心理的関連についてである。対峙したふたりが交わす会話は以下のようなものである。

“Begone!” I shouted. “I’ll never let you in, not if you beg for twenty years.” “It is twenty years,” mourned the voice: “twenty years. I’ve been a waif for twenty years!”
[21]

ここでは ‘twenty’ が4度繰り返される。OEDに ‘Used vaguely or hyperbolically for a large number’ とあるように、ロックウッド氏の使用例は厳密な意味での20ではないことは明らかだ。これに対するキャサリンの反応はほとんど、おうむ返し of 反復とみてよい。しかも、いかにもぴったりに20であるかのように、3度繰り返して正確さを強調する—C. P. Sanger 作成の年表によるとキャサリンは死亡して16年になるのだが、² もちろんこのやり取りが夢の中の会話であることは忘れるべきではない。というより、やまびこのような反響性そのもの

がふたりの間での対話ではなく、ひとりの頭脳の中で発生している、固着した概念の反復を示唆するといえる。ちなみに、'twenty' という語はこの小説のあちこちの様々な文脈で登場し、かなり重みをもっているとみられる使用例—I had read Earnshaw twenty times for Linton [20]; if I knocked him down twenty times [50]; You are worse than twenty foes [91]; Will you say twenty years hence, "That's the grave of Catherine Earnshaw?" [140]; the mysteries of the Fairy Cave, and twenty other queer places [175]; twenty times a day, I covet Hareton [192] – ばかりを拾って もかなりの数に上り、全編にちりばめられているという印象を与える。また、'black' という語にいたっては、ヒースクリフに結びついて数限りなくさまざまな場面に現れる。これはまるで、『嵐が丘』という小説がひとつの空間であり、内部のあちこちからいくつかの決まった文句が乱反射しながら呪文のように響き渡っているかのようであって、『嵐が丘』を訪れる読者はしらずしらずに、つきまとう音楽に始終さらされることになる。

すでに取り上げた幻影の挿話と、最終章における男女ふたりの彷徨する幽霊の挿話は互いに共鳴しつつ、結合している。ふたつの一種異様な挿話は、時間的には約一年半離れているのみで、『嵐が丘』がカバーしている半世紀弱の年月からみればほんのわずかであるが、一見すると遠く隔たっているように錯覚させる。けれどもそれらは小説内の両端に据えられた陸標であり、その空間的配置のために、ロックウッド氏の挿話と相携えて、全体的な雰囲気形成に大きな影響を及ぼしていることは否定できない。

これら三つの挿話の強力なインスピレーションとなった原型的な神話は、おそらく、ワーズワスの「ルーシー・グレイ」('Lucy Gray')であろう—これは『リリカル・バラッズ』第二版(1800)に発表された伝統バラッドのスタイルをもつ作品で、後に作者自身によって「幼少期に関する詩群」の中に分類された。「ルーシー・グレイ」の物語は大略次のようである。山間のムアに両親と暮らす幼い少女ルーシーは、町まで母を迎えに出かける。夜間の荒れ模様を見越した父が道中を照らす明かりをもっていくように言い付けたのである。出発したのは午後早い時間だったが、途中吹雪に見舞われて山々をさまよったあげ

く、ルーシーはついに町にたどり着くことはできなかった。心配した両親は夜中探し歩いて、明け方、彼女の足跡を雪の中に見つけて追っていくと、板橋の途中で消えていた—彼女の死は示唆されるのみで、断定されないのである。そして、今日でも、かわいいルーシーが歌を歌いながらひとり荒野を駆けていく姿を見かけるといふ人がある。ふたつの作品の間に認められる特に顕著な類似点を示すために、以下に対応表を掲げる。³

『嵐が丘』	「ルーシー・グレイ」
I encountered a little boy...There's Heathcliff and a woman yonder, under t' nab [299]	Oft I had heard of Lucy Gray:/ And, when I crossed the wild,/ I chanced to see at break of day/ The solitary child
He probably raised the phantoms from thinking, as he traversed the moors alone [299]	[1-4]
whirl of wind and suffocating snow [11]	'Tonight will be a stormy night—/ You to the town must go [13-4]
the snow and wind whirled wildly through [24]	
a lantern, which I seized...and, calling out that I would send it back on the morrow... 'Maister, maister, he's staling t' lantern!' shouted the ancient [13]	And take a lantern, Child, to light/ Your mother through the snow/...Lucy took/ The lantern in her hand [15-24]
dark night coming down prematurely [11]	The storm came on before its time [29]

<p>The distance from the gate to the grange is two miles; I believe I managed to make it four, what with losing myself among the trees, and sinking up to the neck in snow [26]</p>	<p>She wandered up and down;/ And many a hill did Lucy climb;/ But never reached the town [30-2]</p>
<p>they must set about the search for my remains [26]</p>	<p>The wretched parents all that night/ Went shouting far and wide [33-4]</p>
<p>these were erected and daubed with lime on purpose to serve as guides in the dark [26]</p>	<p>But there was neither sound nor sight/ To serve them for a guide [35-6]</p>
<p>I don't think it possible for me to get home now without a guide [11]</p>	
<p>if you hear me of being discovered dead in a bog or a pit full of snow [12]</p>	<p>They followed from the snowy bank/ Those footmarks, one by one,/ Into the middle of the plank;/ And further there were none [53-6]</p>
<p>I'm come home: I'd lost my way on the moor!...a child's face looking through the window [20]</p>	<p>Yet some maintain that to this day/ She is a living child;/ That you may see sweet Lucy Gray/ Upon the lonesome wild [57-60]</p>
<p>But the country folks...would swear on the Bible that he walks: there are those who speak to having met him near the</p>	

<p>church, and on the moor [299]</p> <p>'It is twenty years,' mourned the voice: 'twenty years. I've been a waif for twenty years!' [21]</p>	<p>And sings a solitary song/ That whistles in the wind [63-4]</p>
--	--

上記対応表に現れた言葉上の共鳴からして、エミリ・ブロンテが『リリカル・バラッズ』第二版を読んでいたことは、おそらく間違いないと思われる。とはいえ、単なる読書経験を物語の最も基盤となる要素のひとつとして借用したとは考えにくい。物語の舞台であるヨークシャーの山岳地帯は作者の生まれ育った地域であり、『嵐が丘』は作者の自伝的背景がなければこのような物語にならなかったことは、作者の姉シャーロット・ブロンテが『嵐が丘』新版(1850年出版)「編者前書き」において証言する通りである。

『嵐が丘』の垢抜けない点については、けなされて致し方のないところだ、かくいう私自身野暮ったさを感じるのであるから。本作は徹頭徹尾、田舎臭く、荒れ野的で、未開で、ヒースの根っこのごつごつしている。また、もしそうでなければ、不自然ともいえる—著者自身、荒れ野の生まれ、養い子であったのだから。運命が彼女を町に据えていたならば、彼女の作品は、よしや彼女が著作を物したとして、別の性質を帯びたことは、まちがいない。⁴

ただしシャーロットが言うのは『嵐が丘』の全般的な雰囲気、泥臭くも感情むき出しの人間模様についてであって、必ずしも「ルーシー・グレイ」と響き合うキャサリンの亡霊のエピソードそのものを特定しているわけではない。姉妹の成長した環境がいくら鄙びていたといっても、すでに、亡霊が跋扈するようなものではなかった。それは、姉妹の子供時代からブロンテ一家のお手伝いとして住み込んでいたタビーから子供たちが語り聞かされた、「あれらの原始的な日々」の物語、過ぎ去った時代のいわばおとぎ話の世界が紛れ込んだもの

だということが、ギヤスケル夫人の『シャーロット・ブロンテ伝』によってわかる。

彼女〔タビー〕は、月夜の谷川の岸辺に妖精たちが出没するあれらの原始的な日々の、「底地」すなわち谷間の地区のことを知っていた。そして、その妖精たちを目撃した人々を知っていたのだ。だが、それは谷あいには水車小屋もなく、近隣の農家では糸紡ぎがまったくの手作業で行われていた時代のことだった。「工場ができてからは、ああいう連中は追っ払われちゃったさね」とタビーは言う。彼女が田舎の遠い日々の話を山と仕込んでいたことは疑いない。昔々の暮らしぶり、かつての住人、今や建物のみ残って、暮らしの名残さえ消え果てた地方地主たち、ある一家の悲劇、暗い迷信的な運命、などを。そしてこれらの種々を語り聞かす際には、幾分とも手加減しなければならないなどは微塵も考えずに、彼女は飾らずありのままの昔話を端折ることなく語るのだった。⁵

エミリの『嵐が丘』がシャーロットの『ジェーン・エア』より古びた時代の印象を与えるのは、彼女が自己の直接的な経験に加えて、このような言い伝えによる過去の世界を物語の中心に据えたことによるのであろう。要するに、彼女にとってワーズワスの「ルーシー・グレイ」は単なるブック・ラーニングによる知識ではなく、伝承バラッドがワーズワスにとってそうであったように、土地の人々の精神構造の核をなす「土着の物語」であり、自らの生まれ故郷の伝承にやすやすとつながる類いのものであったにちがいない。だからこそ、「ルーシー・グレイ」はシャーロットのいう「田舎臭い」物語にこちよく落ち着いているのであろう。そして、このような空想や幻想のちりばめられた昔物語は著しく想像力を刺激する性質をもち、『嵐が丘』がそうであるように、特異な人物や奇怪な事件が不似合いではないどころか、こういうものを呼び込む素地を備えているとっていいだろう。

最後に、おそらくエミリがワーズワス兄妹などと似通った自然界との接し方

を習慣にしていたとの推測を可能にする、『嵐が丘』からの一節を検討したい。結婚を控えたヘアトンとキャサリンは毎晩、夜の散歩を楽しんでいる。

“...You say you don't expect them back for some time—the young people?”

“No—I have to scold them every evening for their late rambles....” [275]

二代目キャサリンの父リントン氏とヒースクリフもよく散歩をするけれども、一方は憂いに沈んでいたり、他方は亡霊に取り憑かれていたりして、風景や天候、鳥のさえずり、草花や木々など、歩きつつ周囲に関心を払っているようにはみえない。これに対して第二のキャサリンの散歩は、むしろ、人間の世界から離れて、大自然の営みのただ中に身を置くことそのものを目的としているように見える—もちろん、後に見るように、彼女の戸外での過ごし方が人間界の状況の影響を受けないというわけではないけれども。

ヘアトンはキャサリンから読み書きを習ったように、農業労働とは違った形で大自然との結びつき、ロマン主義詩人たちに特有の自然との交流の仕方と評すべきものをも教わったにちがいない。キャサリンはこどもの頃からひとり、あるいは、乳母(エレン)を伴って、野外をぶらつくことを大いに好んでいた (The summer shone in full prime; and she took such a taste for this solitary rambling [169]; This twentieth of March was a beautiful spring day...my young lady... asked to have a ramble on the edge of the moor with me [187]). 彼女にとってこのように自然と触れ合い、一体になることは日々の楽しみ、というより、人生の不可欠の要素であるにちがいない。夏と冬における対照的な戸外の風景が精密に描写される中、十代中頃のキャサリンは、前者において風に揺れる大枝の上で同じ木に住まう鳥とともに幸福を満喫し、後者においては唯一本生き残って冬の風に震えるブルーベルに、死に病を得た父あるいは一人後に残されることを恐れる自分の姿を重ねている。

In summer...[f]rom dinner to tea she would lie in her breeze-rocked cradle, doing

nothing except singing old songs—my nursery lore—to herself, or watching the birds, *joint tenants*, feed and entice their young ones to fly: or nestling with closed lids, half thinking, half dreaming, happier than words can express.

“Look, Miss!” I exclaimed, pointing to a nook under the roots of one twisted tree. “Winter is not here yet. There’s a little flower up yonder, the last bud from the multitude of bluebells that clouded those turf steps in July with a lilac mist. Will you clamber up, and pluck it to show to papa?” Cathy stared a long time at *the lonely blossom trembling in its earthy shelter*, and replied, at length—“No, I’ll not touch it: but it looks melancholy, does it not, Ellen?”

“Yes,” I observed, “*about as starved and suckless as you....*” [*it. mine*] [203]

そのようなキャサリンが、長じて、恋人を誘い夜の世界をそぞろ歩く楽しみを見いだすことは至極当然の経過であろう。彼女にとって愛し合う恋人との最も自然で、心地よく、充実した時の過ごし方は、天地四大の動きに気を配りながら大自然に溶け込む戸外での散歩である。『嵐が丘』の悲劇的な人物群キャサリン・アーンショー、ヒースクリフ、ヒンドレー・アーンショー、イザベラ・リントン、リントン・ヒースクリフたちの激動の人生の後に、関係者のうちで最後の人々であるキャサリン・ヒースクリフとヘアトン・アーンショーが仲睦まじい夜の散歩を終えて、家に入る直前、月明かりでお互いの顔を見つめ合う場面で—天からふたりを照らす月の光が “*her light*” と呼ばれていることによって、彼らにとって月がいかに親しいものになっているかが示唆される⁶—メイン・ストーリーが大団円を迎えるという終末からすると、エミリ・ブロンテがこの作品で自然との親密な交流を可能にする荒れ野の散歩にいかにも多くの意味を付与しているかが理解できる。

At that moment the garden gate swung to; the ramblers were returning....

As they stepped on to the door-stones, and halted to take a last look at the moon—or, more correctly, at each other by *her light....* [*it. mine*] [300]

彼らの散歩の詳細は記さず、その最後の場面で象徴させているのである—おおよその様子は、すでにみたキャサリンの夏と冬の散歩の記述から推測することが可能ではあるが、その時期はロックウッド氏の再訪の時であるから、九月である。さまざまな形で自然との関わりを歌うことはロマン主義詩人たちの注目すべき特徴であるが、ここでは、文学的変容を遂げる前の、生の自然体験を記述するドロシー・ワーズワスの著名な日記から季節的に近い記載を選び、キャサリンとヘアトンの散歩がいかにワーズワスやドロシーの散歩に近い性質をもっているかをみてみたい。

20th [October 1800]. After dinner we [William and Dorothy Wordsworth] walked to Rydale crossed the stepping stones and while we were walking under the tall oak trees the Lloyds called out to us. They went with us on the western side of Rydale. The lights were very grand upon the woody Rydale Hills. Those behind [were] dark and topp'd with clouds. The two lakes were divinely beautiful. Grasmere [being] excessively solemn and the whole lake was calm and dappled with soft grey ripples. The Lloyds stayed with us till 8 o'clock. We then walked to the top of the hill at Rydale. Very mild and warm. About 6 glowworms shining faintly. We went up as far as the grove. When we came home...William was disturbed in the night by the rain coming into his room, for it was a very rainy night. The Ash leaves lay across the Road.⁷

散歩はワーズワスにとって詩作の素材探しという目的が加わったが、ドロシーにとっては散策しながら戸外で数時間を過ごすことは、それ自体を目的とする欠かせぬ日課であり、日々の生活に組み込まれた基本的な一部であった。エミリー・ブロンテとドロシー・ワーズワスの記述からは、季節や時間帯によって、あるいは天候によって刻々と変化する、動植物を含む自然の事象に五感を鋭敏に働かせ、時に全身全霊を委ねながら、昼夜を問わず山間の地をそぞろ歩きす

ることが、両者にとって人生の基本モードであることと理解される。

参考文献

1. *Wuthering Heights*. Ed. Ian Jack, with an Introduction and Notes by Patsy Stoneman. New York: Oxford University Press Inc., 1995. 1. 以下引用はこれによる。
2. *Emily Brontë: Wuthering Heights*. Casebook Series. Ed. Miriam Allott. Houndmills and London: Macmillan, 1970. 111. (Excerpt from C. P. Sanger, *The Structure of Wuthering Heights*, 1926.)
3. *The Poetical Works of William Wordsworth*. Ed. E. de Selincourt. Oxford: Oxford University Press, 1940. 5 vols., i, 234-6. 以下、引用は行数を示す。
4. "Editor's Preface to the New Edition of *Wuthering Heights*." *Wuthering Heights*. 325.
5. Gaskell, Elizabeth. *The Life of Charlotte Brontë*. Ed. Alan Shelston. 1857; Harmondsworth: Penguin, 1975. Rept. 1985. 110-11.
6. 例えば、以下に引用する『ドロシー・ワーズワス日記』を先取りすれば、1802年3月16日の記事には月のみならず、その近くのふたつの星までが生き物の如く観察されている。
The moon was a good height above the mountains. She seemed far and distant in the sky there were two stars beside her, that twinkled in and out, and seemed almost like butterflies in motion and lightness. They looked to be far nearer to us than the Moon.
—*The Journals of Dorothy Wordsworth*. Ed. Mary Moorman. Oxford: Oxford University Press, 1971. 102.
7. *Ibid.* 47.